

## セッションA

# DX推進のための「トランスフォーマー」の力 ～虚構を共有する～

セッションAでは、DX推進のためのトランスフォーマー力について検討します。

「トランスフォーマー」とは一般には「変革者」という意味合いで使われています。映画の世界では、タカラトミーと米国ハズブロ社によって展開されている変形ロボットのブランドです。映画が全世界的に展開されているので、視聴した方も多いでしょう。

「DX推進のためのトランスフォーマー力」とは、個々の変革推進者という意味もありますが、どちらかという、タカラトミーの変形ロボットのような状態を組織全体に作りましょうという提案です。DXは長期的な価値創造プロセスを実現することがもとめられます。

さらに、技術の進化は非常に速いため、絶えず新しいスキルや課題対応する必要があります。そのためには、現状の組織分担で課題解決を考えるのではなく、将来のあるべき姿からの逆算で、臨機応変な課題解決やシステム構築ができる機動的なチームが必要になります。まさに、トランスフォーマーロボットのように状況に応じた俊敏な動きがDX的なイノベーションの成功条件です。

今回の未来革新大会セッションAでは、組織のトランスフォーマー力のあるべき姿や能力開発を討議します。

本セッション内容に興味のある方は、ぜひ未来革新大会にご参加ください。  
一緒に議論を深めましょう。



タカラトミーHPから

## 内容

- ・ DX成功企業におけるトランスフォーマー力（自社なりの“虚構”を描き共有する）
- ・ 変革のメカニズムとトランスフォーマーマインド（顧客期待が大きいことから逆算して取り組む）
- ・ トランスフォーマーのための変革ツールセット（インパクト分析、一枚の絵、アブダクションセンス等）
- ・ 各人が主役のやりがいマネジメントを実現（言い出し役、ヒラメキ役、プロト役、展開役等）

## セッションB

# 未来を拓く若い力のナラティブ予見力とコラボ力

多くの企業は、戦略を中期経営計画やロードマップ等に反映しています。しかし、『今の延長線の戦略になっている』、『より長期の戦略構想が必要だ』等と考えている企業もいるようです。

またより長期の戦略を構想する場合、今のマネジメント層の多くは10~20年先にはいなくなる可能性が高いので、できればその時代に先頭に立っているはずの人達、今の若手リーダー層に、長期戦略の構想をさせてみたいと考えている経営幹部もいるのではないのでしょうか。

ただし、今の若手リーダーは、戦略の実践は担っていても、戦略立案や思考の経験があまりありません。さらに、長期の構想に必要な演繹推論、仮説構想等の思考力、その構想仮説の練り上げに必要なナラティブ力、コラボ力を鍛えていません。

企業が長期的な持続成長戦略を、自ら描き、実践したいのであれば、若手リーダー層を未来創りリーダー層にアップグレードするべきです。

未来創りにイニシアティブを発揮するリーダーは、未来を予見し、自らの未来創りをナラティブする（物語る）ことで、他者を魅了し、動かし、共創します。

その人材育成には、上述したような思考力、ナラティブ力、コラボ力を鍛える場が必要です。



## 内容

このセッションでは次のテーマで討議し、次世代リーダーが相互刺激し合い、更なるレベルアップにつながるようにします。

- ・ 次世代のイニシアティブリーダー育成
- ・ 組織の未来創り能力の鍛え方

## セッションC

# 社会課題ソリューションとSISLA活用

SISLA : Social Infrastructure Service Level Agreement

新規のサービスを企画・提供したり、またサービスの内容を変更する際、どのようなことを考え、評価して判断されていますか。

社会の進展とともに顧客の価値観は多様化し、また社会構造も大きく変化してSDGs、働き方改革などの概念が浸透、直接の顧客以外についても考慮していく必要がでてきています。このため価値・サービスを継続して創造していくためには、提供側の一方的な見方だけでなく、様々なステークホルダーの「期待」も考慮していく必要があります。

今回、価値提供者とステークホルダーとの関係を明確化し、価値やサービスの評価を客観的・定量的に行え、さらに価値やサービス創造時に顧客・社会による期待を事前評価として取り込むことが出来る、かつ事業性の観点も同時に評価できるSISLA（シスラ）モデルという考え方を確立しました。

セッションCでは、「SISLAモデルって何だろう？」という興味に応えるためのモデル紹介に続いて、「SISLAモデルってこう使うのか！」と実感していただけるよう、身近な空輸、鉄道にSISLAモデルを適用した具体的事例をご紹介します。きっと「SISLAモデルを使ってみようか！？」とさせていただけると確信しています。

私たちは、SISLAモデルを「期待を科学する」ためのツールだと考えています。

サービス提供に当たって、特に提供前の事前評価の仕方に注目し理解を深めることで、みなさまが生み出し提供するサービスが、より顧客のニーズにマッチし、かつ提供者にも納得感がある、ひいては社会全体のためになるサービスに変革していきます。

当セッションで皆様と討議していきたいと思っておりますので、ご参加をお待ちしています。



## 内容

- ・SISLA(シスラ)とは  
「価値創造・サービス」について、SISLAモデルの紹介
- ・活用事例  
航空会社のサービス戦略分析、地域鉄道会社とステークホルダーによるサービスの評価
- ・SISLAを使ってみよう  
サービス・価値にSISLAを適用し、課題の明確化と解決へのアプローチについて議論



## セッションD

# 企業と社会の持続可能性を「同時に」追求するSX

SX（Sustainability Transformation）という言葉自体はご存知の方が多いと思います。

経済産業省『サステナブルな企業価値創造のための長期経営・長期投資に資する対話研究会報告書（2022年8月30日）』（伊藤レポート3.0）では、SXを、〈社会のサステナビリティと企業のサステナビリティを「同期化」させていくこと、及びそのために必要な経営・事業変革〉と定義しています。

SDGsに示される様々な社会課題、その解決への貢献が企業に求められている今、全ての企業にとって、企業自身のサステナビリティ（持続的成長）と、社会のサステナビリティの関係は不可分であると認識し、同時実現するために必要な経営、事業変革を推進することは避けて通れない、待ったなしの課題です。

そのためには、経営層はもちろん、社員ひとり一人がサステナビリティを自分ごととして捉える必要がありますが、「会社が扱う製品・サービスも、自身の業務も、サステナビリティとは遠い」「だから、自分にはSXは直接関係ない」と、考えている方も少なくないようです。

日頃からサステナビリティに興味をお持ちの方も、そうでない方もお気軽に参加いただける内容です。

皆さまのお越しを心よりお待ちしております。



## 内容

当セッションは、講義とご参加者同士の交流により、以下をご提供します。

- ・SXの概要を知る
- ・一見、そうは見えない業種、職種でも、実は社会課題につながっていることに気づく
- ・事例や他社との交流により、変革のヒントをつかみ、自身やチームのSX実現の物語を創りはじめる

## セッションE

# 各社の改革推進者による ナラティブ・イノベーションの発展議論の場

社内で様々な革新的な活動を推進していくにあたり、必ず脇役として改革推進者の方々が存在します。将来を見据えて会社の組織の在り方や、業務の進め方を変えていくうえで、なくてはならない存在ではないかと思います。

こういった方々は自ら手を挙げて活動に参加されるケースもあり、上司にあたる方から任命されるケースもあるかと思います。改革推進役になった方々はなんとかしてうまくメンバーを巻き込み、全員が同じ気持ちで活動に参画し、一定の成果をあげたいと思っています。

しかしながら、現実はその甘くはなく、いろいろな障壁にぶちあたり、活動が前に進めなくなるケースが多いように感じています。

セッションEでは、改革推進者を数年間経験してきた私自身の経験談を交え、参加していただく皆さんが抱えていらっしゃる課題や今後の日本企業の将来への展望を語り合いながら、ナラティブ・イノベーションの発展に向けた議論ができればと思っています。

おすすめの参加者として、現在当該活動の改革推進者やその活動をサポートされている方、及びこれから改革推進者役にチャレンジしようと思っいらっしゃる方にお越しいただけますと、より議論が深まるのではないかと期待しています。



楽しくワクワクする議論ができることを楽しみに、皆様のご参加をお待ちしています。

## 内容

当セッションは、私を含めてご参加者皆様のご経験談や皆様のお立場を共に語り合いながら、参加者同士の交流により、以下の流れで進めていきます。

- ・会社内での役割、課題や抱負を紹介して頂く
- ・皆様のお話の内容から、これからの企業革新に向けてナラティブイノベーションをテーマに議論し合う
- ・その中からK&Tをあぶり出し、今後の展開に向けた想い(ナラティブ)を語って締めくくりとする。

## セッションF

# モデルベース開発（MBD）を活用した技術革新戦略

セッションFでは、モデルベース開発(MBD : Model Based Development)を活用した技術革新戦略について検討します。モデルベース開発とは聞きなれない言葉ですが、自動車業界では広く使われています。MBDは、製品の企画構想や設計工程でコンピューター上に作成する「モデル」を元に、シミュレーションによる検証を行いながら開発を進めていく手法です。

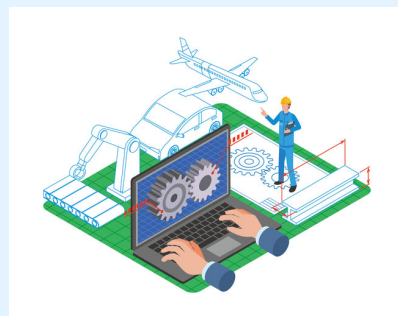
MBDを利用すれば、実機製作を極力減らし、企画や設計段階で繰り返しシミュレーションを行うことが可能になります。結果として、試作費用の低減や品質向上につながります。

また、モデルや検証データの再利用とブラッシュアップが容易なことから、開発効率化や次代の開発へ改善を引き継いでいく役割も果たすと期待されています。さらに、MBDを活用することにより、顧客価値を提供していない業務を削減し、独自の価値を創造する仕事を増やすことが可能になります。これにより、付加価値の高いものづくりをすすめることができます。

本セッションでは、マツダのモデルベース開発導入プロセスと推進体制・成功物語を振り返りながら、今後のMDB導入や活用法について学びます。この検討を通じて、MDB導入はもちろん、DXの推進、新たな技術革新戦略についてのナラティブづくりのヒント満載です。

日頃からモデルベース開発やエンジニアリングDXに興味をお持ちの方も、そうでない方もお気軽に参加いただける内容です。

皆さまのお越しを心よりお待ちしております。



## 内容

当セッションは、講義とご参加者同士の交流により、以下をご提供します。

- ・モデルベース開発の本質を知る
- ・なぜモデルベース開発なのか
- ・マツダ殿におけるモデルベース開発の成果と成功条件を振り返る
- ・変革のヒントをつかみ、自社のDX、MBD実現の物語を創りはじめる